

横山ゆずり作 「メダカ現象」

<前編>

(効果音) (電話のダイヤル音)

野田奈津子 あ、もしもし、信りん？ あたし、奈津子。ねえ、今日どうする？ …うん、そうだね。じゃ、やっぱ、こないだ買った色違いの髪留めにしようか。うん。…うん、分かった。じゃあまたあとでね。6時に迎えに行くから。バイバーイ！

(効果音) (受話器を置く音)

母 おかしな子だねえ。どうせ塾の時に会うんだから、その時しゃべればいいじゃないの。

奈津子 分かってないなあ、ママは。塾へ行く前の打ち合わせってもんがあるわけ。

母 なーんて偉そうに言うけど、どうせ着てくものかなんかのことでしょ。

奈津子 そう。それだって、あたしたちには大事な打ち合わせなの。塾のときは、いつも信りんや広ちゃんたちと“おそろ”って決めてんだから。

母 なんなの、その“おそろ”って？

奈津子 知らないのお？ 古いなあ、ママは。“おそろい”ってこと。

母 へえ、“おそろ”ねえ。おかしな言葉がはやってんのねえ。おとなには通じませんからね、そんなヘンテコな日本語は。

奈津子 ゲロゲロ！ 通じなくて結構ですよお。それより、ご飯早くってばあ。6時に信りんのとこ迎えに行くんだから。

母 はいはい。

(効果音) (食器の触れ合う音)

<タイトル>

ナレーション わたし、野田奈津子。青春中学3年生。一応受験生ってことで、塾に行ったりもしてるけど、なんかまだ実感わかないなあ。結構友達と遊んだりもしてるしね。塾だって、仲良しグループの信りんや広ちゃん、香苗に知美も一緒だから、半分遊びって感じかな。現在のわたしたちの話題と云えば、もちろん修学旅行のこと。2泊3日、ずっと友達と一緒になんて、ほんと楽しみ！ 今からみんなと持っていくものの相談とかしてるわけです。

(効果音) 教室のガヤ)

委員 (男子) 静かにしてください。ほかに意見ありませんか？ 修学旅行の自由時間と宿での服装について、意見言ってください。

全員（口々に） 「自由でいいよ、自由！」 「なんでもいいよねえ」 「別に制服でいいじゃん？」 「やっぱ自由よね」

委員 意見のある人は、ちゃんと手を挙げて言ってください！

全員 （シーンとする）

委員 ほかに意見がなければ、うちのクラスは安井君の出した、“宿では体育祭のときのジャージ” ということで、学年委員会に出しますけど、いいですか？

全員 「えー！」 「冗談じゃねえよ、ジャージなんてよお」 「だせえよな」 「やだー！」

委員 じゃ、どうしたらいいですか？

先生 おい、お前ら、さっきから黙って聞いてると、だらしないぞ。自分たちのことだろうが。お互いに意見を出し合って、お前たちが自主的に行動していけるように、ということで今回の話し合いになったんだぞ。言いたいことがあるんだったら、ボソボソ言ってないで、堂々と発言してみろ、堂々と。

全員 （シーンと沈黙）

先生 意見はないんだな？ それじゃC組は全員一致でジャージということに決定だ。あとで文句言うなよ。

委員 えー、では、そういうことに決まりましたので。この次の学活の時には、修学旅行の班を決めますから、考えてきてください。じゃあ今日はこれで終わりにします。

（効果音） （教室のガヤ）

奈津子 あーあ、私服になると思って楽しみにしてたのになあ。ジャージだって。

酒井信子 ダサくてやんなっちゃうよね。奈津子、言えばよかったのに。「服装は自由がいいと思います」って。

奈津子 まさか言えるわけないじゃん。あそこで何か目立つこと言ったら、目つけられるに決まってるんだから。

信子 言えてる。先生も汚いよね。理解がありそうな顔しちゃってさ。こっちがうっかり本音言っちゃうと「だれだれが問題発言をした」とか職員室でチクるんだから。

奈津子 そうそう。だから、おとなしくしてんのが結局一番安全なんだよね。ねえ、それよりさ…。

ナレーション …とまあこんな調子で、修学旅行まであと2週間。今日は班を決める、という日、あいにくわたしは熱を出して、学校を休んでしまった。次の日、学校へ行ってみると――。

（効果音） （チャイム）（朝の教室のガヤ）

奈津子 おはよう、信りん。

信子 あ、奈津子。もう熱下がったの？

奈津子 うん、もう平気。それよりさ、昨日の学活、どうだった？ 班とか、新幹線の座席とか、決まったんでしょ？ ゆうべ、信りに電話して聞こうかなとも思ったんだけどさ。ね、あたしたち、何号車？

信子 うん、それがね…。あたしもゆうべ電話しようかなと思ったんだけど…。

奈津子 どうしたの、信りん？ ヘンだよ。

信子 奈津子、ごめん。

奈津子 え、何？ なんのこと？

信子 実は、昨日班を決める時にね、男子 4 人、女子 4 人で班つくって先生が言ったんだ。それで…。

奈津子 4 人？ じゃ、あたしたちのグループは、5 人一緒になれなかったってこと？

信子 あたしたち 4 人は同じ班になれたんだけど、奈津子だけ…。

奈津子 ウソ…。そんなのって…。

信子 ごめん。でも仕方なかったんだよ。あたしたち、どうしても 5 人一緒にしてほしいって頼んだんだけど、ダメだって言われて。

奈津子 だからって、あたし一人だけ別のグループの子たちと組ませられるわけ？ ちょっとひどいよ、それ。

信子 ほんと、ごめん。だからさ、班は分かれちゃうけど、京都に着いたら、見学の時とか、お土産買う時とか、一緒に行こうよ。夜だって、あたしたちの部屋に来ればいいんだし。

奈津子モノローグ 信りんはそう言うけど、班が違っちゃえば、新幹線やバスの座席だって離れちゃうだろうし、宿の部屋だって別々になっちゃうんだから。そしてたら信りんや広ちゃんたち、あたしのことなんて忘れちゃうに決まっている。

ナレーション そんな風に考えていると、あんなに楽しみにしていた修学旅行が、だんだんイヤになってきた。いっそ、仮病を使って休んじゃおうか、とまで考えていた。そんなある日――。

(効果音) (チャイム) (教室のガヤ)

男子 1 野田、何しらけた顔してんだよ。ここんとこ妙におとなしいじゃん。ヘンなやつ。

奈津子 何よ。あたしが静かだとなんでヘンなのよ。

男子 2 いや、いいけどさ。このごろ、あの“トイレ友達軍団”と群れてないからさ。

奈津子 何よ、その“トイレ友達軍団”って。

男子1 トイレ行くのまで、いつもくっついて、ゾロゾロ行ってくることだよ。(女子の口まねで)「行く? うん行く。あたしも。ねえねえ、奈津子も行かない?」とか、いつもやってんじゃん。全く、何が面白くてああ群れ歩いてんのかと思ってたら、突然こうだもんな。お前、仲間外れにされたの?

奈津子 違 うわよ。ほっといてよ、うるさいわね。用がないならあっち行ってよね。

男子2 あ、そういう言い方はないんじゃないの? せっかくいいこと教えてやろうと思ってたのに。(男子1に) なあ。

奈津子 ふん。どうせくだらないことでしょ。付き合ってるんじゃない。…でも、なんなの?

男子1 ほらこれだ。マジな話だよ。今、職員室に森川先輩が来てるんだぜ。テニス部の森川先輩だよ。さっき、先生と話してるの見たんだ。

奈津子 ほんと?! それを早く言ってよね。職員室ね。サンキュー!

ナレーション 森川俊介先輩はテニス部の2年先輩。すごく頭がよくて、カッコいいし、頼りになるし、わたしたちのあこがれの人なのです。テニスはもちろん、そのほかいろいろ個人的なことでも、相談に乗ってもらったし、お世話になってるんだ。それにしても、なんてグッドタイミング。こんな落ち込んでる時に、先輩が来てくれるなんて。

奈津子 (オフから) 先輩! 森川先輩!

森川 あ、奈っちゃん。久しぶり。元気だった?

奈津子 はい。先輩もお元気ですか? しばらく練習にいらっしやらないから、どうしたのかと思ってたんですよ。ほかのOBは結構来てくれてるから。いろいろ話したいこととか、相談に乗ってもらいたいこととか、いっぱいあるんです。

森川 ごめんごめん。去年の秋ごろから、ちょっとバタバタしてたから。

奈津子 学校、忙しいんですか? 先輩、高校でもテニス部に入ったんですよね? やっぱり大変ですか、勉強と部活の両立って? なんてって、天下のK大付属ですもんね。みんな頭いい人ばかりなんでしょ? あ、でも先輩なら大丈夫ですね。

森川 奈っちゃん。おれさ、やめちゃったんだよ。

奈津子 えー、やめちゃったんですか? 先輩にはテニス続けてほしかったなあ。

森川 そうじゃなくて、おれ、K大付属高校をやめちゃったんだ。

奈津子 ウソ! まさか、ウソでしょ。ウソでしょ、先輩?

森川 本当だよ。去年の秋に退学届出して、もう一度高校受験して、この春から都立高嶺高校の1年生やってるんだ。再受験で中学の先生にもずいぶんお世話になったから、今日はあいさつに来たってわけさ。

奈津子 ほんとなんですか？先輩が退学なんて信じらんない。どうして、どうしてですか？

森川 いろいろあったんだけど、でも結局、あの学校と相性が悪かったってことかな。

奈津子 そんなぁ！相性が悪いだなんて。「あの学校はうるさい規則はないし、自由でいい」って言ってたじゃないですか。

森川 入ってみたら、結局ほかの高校と同じだったんだ。個性が育たないっていうか、規則のない分、みんな競って流行追って、女子だけじゃなくおれたち男子まで最後は結局似たり寄ったりの格好になっちゃう。でもその着せ替え競争に加わらないと、白い目で見られちゃうんだ。だから、いつの間にかみんな同じような服装、同じような話題を追いかけていくようになる。まるで群れて泳いでるメダカだよ。メダカの集まり。

奈津子モノローグ メダカ？“メダカの集まり”か…。

ナレーション わたしはその言葉を何度も心の中でつぶやいていた。

<後編>

ナレーション わたし、野田奈津子。青春中学 3 年生。修学旅行を間近に控えて楽しいはずなんだけど、このごろ落ち込んでる。なぜって、仲良しの信りんたちと、修学旅行の班が分かれてしまったから。「こんなんなら、行くのやめちゃおうかな」、なんて思っていたある日、テニス部 OB の森川俊介先輩が、学校に来てくれた。頭がよくて美人で、頼れる先輩。落ち込んでるわたしの愚痴を聞いてもらえると思った。ところが――。

<タイトル>

奈津子 ウソー！ウソでしょ、K 大付属やめたなんて。

森川 本当だよ。そりゃ、おれだって受かった時はうれしかったよ。一応私立の難関高と言われるところだからね。それに、ガリ勉させる学校じゃないから、きっと個性的で面白い子が多いんじゃないかなと思って楽しみにしてたんだけど。でも実際入ったら、違ってたんだ。制服の規則なんか緩いから、みんな張り合っておしゃれしてる。女子はもちろん男子まで。でもそれが似たり寄ったりなんだ。例えば女子は友達がディオールのバッグ持ってるから、自分はヴィトンだとかなんとかね。

奈津子 へえー、そうなんですか。

森川 遊びに行くのだって、普通は高校生が行かないような派手なところで遊んでるけど、それだって、雑誌の情報に振り回されてるだけって感じがするんだ。だから新生はみんな必死になって、それに染まろうとするわけ。人よりほんのちょっぴり目立ちたいけど、みんなと同じ枠の外には

み出しちゃうのが怖いんだ。いつも人の目を気にしてる。で、勉強のほうはどうかと言うと、先生が生徒を信頼するとかで、試験の監督なんか甘いから、カンニングがはびこってるし。部活も、そりゃ盛んだけど、どっちかって言うと、ほかの私立校との交流のほうに一生懸命だし。

奈津子

へえー。信じられない。

森川

そういう中にいるとね、“自分は違う。しっかりしよう”って思っても、やっぱりダメなんだ。メダカが群れて泳いでいくように、みんなと同じ方向に流されそうになっちゃう。その雰囲気には染まらない人間は、逆に校風から浮いてるって目で見られちゃうし。“なんか息苦しいな”と思ってたのが、秋の文化祭でピークに達しちゃって。もうこれは、きっぱりやめて、もう一度やり直そうと思ったのさ。

奈津子

森川先輩、そんなことがあったんですか。ちっとも知らなかった。

森川

今度入った高嶺高校は、K大付属みたいなヘンなプライドがなくて、それに都立だから、少しガサツだけど、いろんな子がいて面白いよ。みんな、“人がどう思うか”じゃなく、“我が道を行く”って感じだしね。

奈津子

へえ、先輩、勇気あるなあ。だって友達はまだ2年生でしょ。みんなに取り残されちゃうっていうアセリはないんですか？

森川

だって人は人だろ。おれはおれ。無理して他人に合わせていったって、だれも責任とってはくれない。

奈津子

ふーん。先輩は自分の信念みたいなのがちゃんとあるんですね。

森川

そんな立派なものじゃないけどね。それより奈っちゃん、何かおれに相談があるとか言ってなかった？

奈津子

え？ いえ、いいんです。大したことじゃないから。

ナレーション

森川先輩の話聞いたあとでは、とてもわたしの愚痴を持ち出すことはできなかった。自分の考えをしっかり持ち、勇気を持って自分の道を選んでいる先輩の前で、わたしの悩み、“修学旅行の班が友達と離れたから行きたくない”なんて甘っちょろいことを言ったら、恥ずかしいような気がしたのだ。

奈津子モノローグ そういえば、森川先輩って、前からそうだったなあ。中学のテニス部で、試合前でも「日曜日の午前中は練習休みます」って、きっぱりコーチに断ってたっけ。そうだ、先輩、教会に行ってるからって言った。「部長が休んじゃ示しがつかない」って言われても、「練習より大切なことだから」って譲らなかったんだ。その分、普段は一人で朝練やって、結局都大会まで行ったんだからすごいよね。それにしても、“メダカ”か。うまいこと言うな、先輩。あたしなんか、きっと群れの一番真ん中のほうで、みんなの流れに乗っかっていくだけの、ミーハーメダカなんだろうな。

でも、そうするしかないもん。あたしなんて、森川先輩みたいな信念ないもんね。

(効果音) (街の雑踏。車の音)

ナレーション そうこうするうちに、修学旅行がやってきた。案の定、信りん、広ちゃん、香苗と知美たちは、初めから4人の仲良しグループだったみたいに、いつも一緒に、わたしのことなんか忘れちゃったみたい。“この分じゃ、東京へ帰ってからも、話題についていけないな”なんて思っていた。でも、“独りっていうのも悪くないな”と少しずつ感じ始めてもいた。今までよりも、いろんなものを冷静に見られる感じだし。何よりも印象的だったのは、ほかの学校の修学旅行の軍団。そう、まさに“軍団”と呼ぶしかないような、黒づくめの制服に黒いバッグの“カラス集団”。そのそばを、外国人観光客が不思議そうな顔でジロジロ見ながら、通り過ぎてゆく。わたしたちだって、端から見ればきっと同じような集団なんだろうな。メダカと…カラスか。同じような格好で、先生の号令で集まったり、散ったり、整列したり。もしかしたら、中身まで同じようになってきちゃってるのかもしれない。そう考えると、なんだかゾツとしてしまう。

男子1 おい、野田。どうしたんだよ、ポーっとしちゃって。

奈津子 え？あ、なんでもない。ちょっと考え事してただけ。

男子1 なんだよ、野田。暗いなあ。修学旅行なんだからさあ、難しい顔しない。楽しまなくっちゃ。

奈津子 分かってるって。ねえねえ、これから行くところってさあ…。(FO)

ナレーション 一瞬、友達に“暗い”というレッテルをはられることを恐れて、無理にはしゃいでしまってから、そんな風にいつも人目を気にして人に合わせてしまう自分に気がついて二重の自己嫌悪に陥ってしまった。

その夜、みんなが仲良しの子と連れ立ってお土産を買いに行ったりしたあとの静かな部屋で、わたしは絵葉書を書いた。もちろん森川先輩にも。先輩なら、今の自分のモヤモヤした気持ちを素直にぶつけられる気がしたのだ。

それから1週間ほどたったある日――。

母 奈津子、あなたに手紙が来てるわよ。

奈津子(モノローグ) へえ、だれからだろう。…あ、森川先輩からだ。

(効果音) (封を切り取り出す音)

奈津子(読む) 奈っちゃん、お手紙ありがとう。修学旅行は楽しかったですか？(途中から森川の声)ただあちこち見学しただけではなく、いろいろと考えるところがあったようだね。実り多い経験で何よりだった。奈っちゃん

なりにいろいろ悩んでいることも知った。そういう気持ち、おれにもよく分かるよ。前はおれも奈っちゃんと同じだったから。おれの高校退学のこと、“勇気がある”と言ってくれたね。でもおれ自身は、そんなに強い人間ではないし、自分に自信があるわけでもないんだ。もしそう見るとしたら、おれが信じているイエス様のせいだと思う。おれがクリスチャンだということは、奈っちゃんも知っているだろう？ そもそもおれが教会に行き始めた動機は、どうしても自分に自信が持てず、自分が好きになれなかったからなんだ。でも教会に行って、聖書のお話を聞くうちに、少しずつ気持ちが変わってきた。何よりもおれが心を打たれたのは、ある聖書の言葉だった。「わたしの目にはあなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」それまでのおれは、友達や親や先生によく見られたいという気持ちが強くて、自分の価値観の基準は、いつも“他人の目”だった。でも、このおれのありのままを「高価で尊い」「愛している」と言ってくださるイエス様を信じてから、変わったんだ。人間で弱いものだから、人と違うことをして白い目で見られるのは怖い。でもおれは、おれの絶対的な味方になってくださる方に出会うことができたから、人のことを恐れなくて済むようになった。奈っちゃんもよかったら、今度一緒に教会に行ってみないか？ 返事を待ってる。 森川俊介

奈津子モノローグ 先輩が、自分に自信が持てず、自分が好きになれなかったなんて、信じられない。あの、いつも自信にあふれて、思ったとおりの生き方をしている先輩が、ほんとにまぶしかったのに…。

ナレーション わたしは、森川先輩の意外な一面を見たような気がした。“しょせん、自分とは人間の出来が違う。”そんな、先輩に対する以前の気持ちが少しずつ消えかかっていた。

奈津子モノローグ でも、もし先輩の言っていることが本当だとしたら、先輩をあんなふうに変えたのは、イエス様なんだ。ほんとかなあ。でも、ほんとだとしたら、イエス様ってすごいよ。絶対すごい！ だけど、わたしはどうかな。群れの中のメダカ。先頭がスイッと向きを変えると、さっとそっちに合わせてしまうミーハーメダカ。一人だけで自分の思ったほうに進むことができない。怖いんだよね。でも、でも神様がいつも一緒にいてくださるんなら、平気かもしれない。「あなたは高価で尊い」か…。

奈津子 よし、先輩に電話だ！

ナレーション そう言うなり、わたしは階段を駆け下りたのだった。

<完>